

「特集にあたって」

地域研究の対象としての金門島

川島 真

I 「金門学」の問いかけるもの

廈門の海岸線に立つと、曇った日であっても金門が見える。正確には小金門（烈嶼）が見えているのだが、至近距離で二キロ前後の廈門と金門との間には六〇年以上にわたる歴史の断絶がある。周知の通り、一九四九年に中華人民共和国が建国され、中華民国政府が台湾に遷った後、一九九二年にいたるまで、この廈門と金門の間の境界線が国共間の軍事前線のひとつになったのである。昨今、国共間、あるいは東アジアの冷戦の最前線に位置してきたこの金門島が、その過去を見つめつつ、装いを新たに、ふ

たたび新たな歴史に踏み出そうとしている。

日本ではあまり知られていないが、中国語圏の学界では「金門学」という新たな地域研究が話題になっている。一九八〇年代から九〇年代にかけての民主化の過程で、台湾の人々が台湾や台湾人を研究し、アイデンティティを確認していったように、昨今の金門島では金門の人々によって金門が研究され、アイデンティティの再形成がなされてきている。

このような動きを中華民国の統治下にある金門県としての「郷土の再発見」だと見なすこともできるだろう。しかし、台湾との深い関係を意識しながらも、金門学が想定している対象は、台湾の一部としての金門では必ずしもない。それは、金門をひとつの地域と見なし、自然科学、社会科学、人文科学の

諸学問を総合的に用いた地域研究として意識されている。また、この研究を推進し、「知」を育んでいるのは、国立金門大学という地域の学術機関のほか、金門県などの行政の文化機関、そして『金門日報』などのメディア、さらには地域の教員をはじめとする市民たちである。

ある地域が独立したり、民主化したりする際に、「知」の再構成や再発見が行われることは珍しいことではない。また、往々にして、そうしたアイデンティティ形成と強固に結びついた研究領域は、語り手をコミュニティの構成員に限定したりするなど、当事者性を参加要件にするなど、閉鎖性や偏向性をもたうことがある。そのコミュニティに属し、歴史を経験した者でしかわからない情感が、その「知」を支えるという側面があるからである。このような現象じたい、地域意識の形成要因や形成過程という点で研究対象となりうる。だが、金門学が問いかけてくるものは、それだけでないし、また閉鎖性が顕著に見られるわけでもなく、むしろ外の研究者などにも「開かれている」と言ってい

Ⅱ 歴史に裏打ちされた個別性(一)

—— 僑郷

金門島という対象が、島内社会構成者を超えて注目されるのには、大別すれば二つの理由があるだろう。どの地域にもそれぞれ固有の歴史があるものであるが、金門の場合、それを地域として際立たせる歴史が(単純化すれば)二つあり、それが研究者を魅きつけていると考えられるのである。

ひとつは近世以来、この島が海外移民を送り出す郷村、すなわち僑郷であったということである。金門はもともと降水量が少なく、土地も痩せている。農業中心の小農経済に依存することは困難で、島民は海外との交流、あるいは移住することで生計を立てるようになった。また金門の人々は航海術にもたけていたという。他方、金門社会は、宗族的な紐帯の強い単姓村で構成され、移民もまた郷村単位で行われることが多かった。漳州など福建から金門への移民も活発であったが、金門社会での一定の生活を経て、郷村を単位として海外に移住していくことが多く見られた。そのため、金門島内では、成人して

結婚して子をもうけると、海外に移民し島外でも家庭をつくる男性が少なくなかった。その結果、とりわけ移民が活発な時期には、島内人口は女性が多くなり、子どもの教育や家計管理、また郷村の運営や宗族の行事関連の業務などの面で、女性の社会的な役割は大きくなった。

二〇世紀になると、交通や送金が便利になり、往來はいっそう活発になった。中央政府や地方政府の統治が弛緩していったこともあって、「僑郷としての近代」を金門島も体験した。すなわち、海外への移住者たちからの送金（僑匯）が小学校や衛生、インフラ建設などの島の公共部分から、宗族の活動、そして家計などの私的領域にもいたる、島の経済、財政全体を支えたのであった。また、送金だけでなく、予防接種などの衛生面での知識、学校教育のありかた、さらには建築の設計、技術、意匠、デザインにいたるまで、さまざまなものが、移民先であった東南アジアなどからもたらされた。それは、植民地のコロニアル・モダンを含む、それぞれの移民先などからもたらされた、多様で複合的な近代であった。食生活においても、コーヒーや唐辛子を使用した調理法などが島にもたらされた。海外に移民した家族と、島内の村々との関係は、送金とともに、個

人的な書簡、そして村単位で発行され移民先にも届けられる新聞（僑報）などによって支えられていた。

一九三七年から四五にかけての日本占領期には、移民が全面的に制限されたわけではないが、島民はアヘン栽培を強制されたり、飛行場建設などに動員されたりするなど、その社会・経済活動は相当抑制され、送金も途絶えがちになった。戦後になると、送金が復活し、僑郷としての性格が取り戻された。だが、国家の統治が強まって徴兵制が施行されたこともあって、徴兵対象となる男性たちは海外から帰島せずに送金だけを行った。

一九四九年に島が戦場となり、中華民国によって軍事最前線として軍事動員体制が強化されると、この「僑郷」としての性格は失われた。島内の社会経済活動はすべて軍事動員に結びつけられ、移動にも制限が加えられ、送金はそのルートや為替の関係で、従前ほどの意味を果たさなくなった。軍事動員体制の下で、郷村の基礎をなす宗族は動員の最小単位として位置づけられつつも、同時にその祭祀活動などは制限されていた。海外との往来は、書簡レベルでも検閲されるようになった。だが、海外との往来が断絶したわけではない、ということが重要だ。たとえ金門が軍事最前線になっても、華僑送金や帰

国する人はごくわずかながら存在したし、華僑の慰問団などに加わって故郷を訪ねる金門出身者もいたのである。

一九九二年、金門は軍事管制を解かれる。社会経済活動も自由化されるが、僑郷に回帰するということはなかった。だが、たとえば現在でも宗族を単位とした郷村が県長選挙や県議会選挙の活動基盤となるように、一定程度その僑郷としての生活は維持されている。また、軍事管制下でも島と海外の関係が継続していたことや、島内人口が一〇万弱であるのに対して台湾を含めた金門島外の金門出身者が七〇万を数えるという、そのコミュニティの広がり、金門社会にひとつの可能性を与えたことは言をまたない。金門学は、しばしば海外の金門人をもその研究対象とする。そして、海外の金門出身者を再訪する金門学の動きにより、移民者と金門の関係は再び活性化し始め、多くの寄付金が金門に送られ、公共事業や学校経営に用いられ始めている。以上のように、「僑郷」という近世以来のその特徴が、金門を特徴づける、ひとつの重要な要素となってきたのである。

Ⅲ 歴史に裏打ちされた個別性(二)

——軍事最前線の島

金門をひとつの地域として際立たせているいまひとつの側面は、いうまでもなく、一九四九年から一九九二年まで続いた軍事最前線としての性格である。「僑郷としての近代」としての性格が失われていっただけでなく、福建省沿岸地域でも数少ない中華民国側の拠点として、元来関係の深かった廈門などとの関係が引き裂かれることになった。また、一九五〇年代半ばから台湾側との移動も制限され、通貨も別にされていた。そうした意味で、金門は完全に孤立していたとはいわないまでも、相当程度に周囲と隔てられた空間となったのである。金門社会は、四〇年以上にわたって、中国側の福建沿岸の島々とも台湾本島とも異なる歴史を体験していたのである。

軍事最前線となったことによって金門島の受けた物質的な打撃は計り知れない。一九四九年には人民解放軍が上陸して島は戦場になった(古寧頭戦役)。国府軍がこれを撃退したが、人民解放軍の兵士が島

内に残されたという嫌疑もあり、県政府は戸籍管理を嚴重にし、島内の移動も制限された。一九五八年には、中華人民共和國側から数十万発の砲弾が金門島に降り注いだ。これにより島の基本生活は破壊され、建築物なども砲弾が届きにくかった一部を除いて破壊された。この時もたらされた砲弾は、島の包丁産業を支える材料となったというが、島の受けた被害は甚大であった。

このような状況の中で、軍事動員体制は強化され、子ども、女性、老人を問わず、金門社会全体が、島民人口を上回る駐屯兵に対する兵站基地として、また男性の一部は兵力供給源として期待されたのであった。二〇世紀前半に島に普及していた、移民先の影響を受けた「近代的」生活は、ラジオなどの通信機器なども含めて戦時に不適切としてほとんど放棄され、また宗族の祭祀などの活動は非近代的として制限された。学校教育では、国家イデオロギーが強調され、動員強化のための拠点として利用された。また、戦時動員期の金門社会、とりわけジェンダーバランスは戦前期とは異なる状況に陥っていた。すなわち一〇万を超える軍人が島に来ることによって、もともと女性人口が男性人口を上回っていた人口が逆転し、兵士が村内にも居住することで、生活

面でも多くの影響が出るようになった。また、女性の生活習慣、身体、精神の改造が、金門島の動員のひとつの目標とされ、女性の置かれる状況は大きく変化することになった。

金門がこのような状況に陥った背景には、ひとつには冷戦という大きな物語がある。ワシントン、モスクワ、あるいは北京における決定が、この島の社会生活に影を落としていたことは否定できない。それが国際政治の焦点としての性格をこの島の歴史に付与したのである。また、北京と台北の国共の対立や、東アジア域内の東西対立の構造もまた、金門に色強く投影されていた。それだけに、従来は、このような大きな物語から俯瞰するかたちで金門へと関心がそそがれていた。だが、金門島内の状況はこうした大きな物語だけで描き切れるものではない。

金門をひとつの地域として際立たせている、四十年にわたる軍事最前線としての経験は、台湾本島のそれとは異なる。また、金門の人々は、台湾本島において、その金門の経験が忘却されていることにもすでに気づいている。他方、かつては経験をともにした福建や広東の沿岸部とも異なる歴史を、自らが体験したことも、金門で知られている。そのような状況の中で、金門島内では、自らのアイデンティ

ティを模索しつつ、先に述べた「僑郷としての近代」とともに、戦時総動員体制下に置かれた経験という、金門を金門たらしめることの意義を社会全体が受け止め、記憶化（忘却化）する過程が続いている。学術的な研究は事実を解明し、金門社会でも軍事最前線期から残された遺物などを観光資源としつつ、次第に社会的、個人的な記憶を再構成しつつあるのであろう。

IV 個別性と表裏をなす開放性

上記のように、一〇〇年に亘る僑郷としての歴史と、四〇年以上の軍事最前線としての歴史が、金門をひとつの特徴ある地域として育んだ。そして、二一世紀に入り厦門との直接航路が開設されるなど、かつての軍事最前線が今度は兩岸交流の前線となるなど、金門の歴史に新たな要素が刻まれつつある。これは、金門の人々に、台湾とも中国とも異なるというアイデンティティをいっそう強く抱かせたかもしれない。僑郷と軍事最前線という二つの大きな要因が組み合わさることで、金門は福建沿岸部や周辺島嶼とも台湾とも異なる歴史を育んだが、それ

だけでなく、一九九〇年代以後の歴史もまた金門特有の側面を孕んでいると見ることもできる。

だが、金門が歴史的に形成されたひとつの特色ある地域だということが、ただちに孤立した、特殊な閉じた空間であるということを意味するわけではない。じつのところ金門の有してきた歴史的な特色というものは、独自性を示すだけでなく、いわば外に開かれた、外的世界との強い関連性を伴うものであり、また同時に他地域にとつて比較可能性を持つものであった。まず、僑郷としての側面について、たとえばある村（筆者の場合は西部の珠山）に宿泊しながら、その村の人々の話を聞き、またその僑報に目を通していくことで、その郷村が歴史性の中にあることだけでなく、西太平洋の各地に移民を送り出し、現在でもその海外の親戚たちとネットワークを保ち、一二月の宗廟の祭祀には各地から親戚が集まってくるということを知る。その静かな村の背後に大きな広がりがあるのである。もちろん、海外に移住して二代三代を経た人々は、祖先がその村の出身であることを忘却しているかもしれないし、移民先の現地社会に十分に適応しているかもしれない。だがそれでも繋がりが絶えない人はいるし、金門の側からのネットワーク維持の努力も続けられてい

る。

また、二〇世紀半ばまでの金門が辿った歴史は、中国東南部の福建から広東の沿岸部に広く見られるものでもある。澎湖や台湾との関係が緊密であることはやや特殊であるが、「僑郷としての近代」を体験したことや、日本の占領下に置かれたことなどは共通する点が多い。そして、これらの地域の歴史は単に中国東南部の地域史だけでなく、東北アジアや東南アジア全体を含んだ、より広域的な歴史の下に位置づけられるものだと考えられる。ここで留意すべきは、中華人民共和国による統治初期の華南侵攻や文化大革命によって、「僑郷」のさまざまな文化や記憶が華南地域で失われがちだということだ。その点で、金門はたとえ軍事最前線になり戦時統治を経ているとはいえ、その保存の度合いは大陸よりもよい。金門は「僑郷」研究のひとつのサンプルを提供しているのである。なお、移民の問題を研究する場合、送り出す側だけでなく、移民を受け入れるホスト社会との移民たちの関係もまた大きなテーマとなることはいうまでもない。その点で金門の人々がいかなる特徴を有するかは、今後の検討課題である。

他方、一九四九年以後の軍事最前線化が、国共内戦、東アジアの冷戦（熱戦）、世界的な冷戦などの

ひとつの象徴であったことはいうまでもない。蔣介石や蔣経国らの国家の領袖だけでなく、自由陣営に属する国々から多くの政府高官や軍人が金門を訪れ、米軍の将校も滞在した。そして、根本博のように軍人として金門の戦場に立った日本人もいた。戦後日本は平和国家の道を歩んだというイメージがある一方で、決して戦前と断絶してはいない、新たな戦後日本像も金門島から垣間見えるのである。そして、軍事最前線化された金門が、いわば台湾の防波堤となつて多くの犠牲を強いられただけでなく、中華民国の支配領域における辺境と位置づけられるようになったこと（あるいはそのような記憶が金門で形成されたこと）も看過できない。金門の地を踏む台湾の青年軍人たちにとって金門はまさに異域であった。

このように金門はさまざまな広がりや比較の可能性に満ちているが、それは一九九二年以後も変わらない。軍事最前線から解放されて以後のことは、軍事最前線がいかにして日常生活を取り戻すのか、あるいは歴史性を取り戻すのか（いかに過去を記憶化するか）といった比較可能性のある課題にとりくむ姿を提示しているのである。

V 地域研究における金門研究の意義

この『地域研究』という雑誌で、あえて金門を採り上げたのには大きく分けて二つの意図がある。第一に、地域研究における対象の設定の問題である。地域研究では、対象をミクロに設定して、そこを深く掘り下げていくことが多い。もちろん、それによってその地域の内在性を抉り取るという、方法論的優位性を地域研究は有している。際立った特殊性を有する金門において、その方法は有用である。だが、金門の場合、前述のような特質を持つがため、深く掘り下げるほど、より大きな空間を意識し、他地域との関係性や比較の中で考察することが求められる。対象を掘り下げることによって、特殊性と固有性だけでなく、空間的な広がりや普遍性、共通性が浮かび上がるのが、この金門という対象の特徴である。そして、このような対象と取り組むことで、往々にしてアブリオリに設定されがちな東アジア・東南アジアなどといった区切りを相対化できるのではなかるうか。このような空間的な広がりや越境性が、金門島を本誌で取り上げようと考えた理由のひ

とつである。

第二に、金門社会が大きな歴史的な文脈の下で特徴づけられているということである。つまり、固有性や特殊性というものが歴史に裏打ちされ、その歴史をいかに受け止めるかということが、現代的課題でもあるということである。地域研究は、*「現在」*に関心を置き、歴史をひとつの背景に設定しがちである。だが、記憶の再構成が進む金門では、歴史が現在を支え、歴史が現代的課題となる。そのような、まさに地域が地域として、歴史の中で形成されつつある金門を考察することで、長期的な時間を視野に入れた地域研究という問題提起ができるのではないかと考えたのである。

VI 本特集の構成

このような研究対象としての金門を、この特集だけで語りつくすことは難しい。また、金門研究の歴史は決して長いものではなく、少なからず専著があるとはいえず、その研究は端緒に終わったばかりである。また、これが日本の学術雑誌で金門島が特集として取り上げられる（おそらく）最初の機会である

う。こうした状況にも鑑みて、この特集では金門の歴史性を構成する「僑郷とし近代」という面と、戦時総動員という面の二点を重視すべきであろうと考えた。また、昨今展開されている金門島研究の先端的な事例研究を、読者に提示することも必要だと考えた。

そこで、特集を三篇構成とし、海外から二人の書き手を迎えた。一人は、金門の戦時動員体制について、俯瞰的な国際政治的というよりも、むしろ島の内側から分析した『冷戦島——前線としての金門 (Cold War island: Quemoy on the front line)』(Cambridge, UK: New York: Cambridge University Press, 2008) という著書を著し、英語圏に金門研究の意義について問題提起したハーバード大学のマイケル・スゾーニ (Michael Szonyi) である。寄せられた論考は、同書のエッセンスというべきものであり、戦時動員体制下の金門の状況を分析するだけでなく、その記憶化という現代的な課題も提起する。二人目は、国立金門大学で長期にわたって金門学をリードしてきており、金門と名のつく特集では必要不可欠な研究者だと思われる、江柏煒である。江は建築学の出身であるが、以後、金門の街並み、歴史などを幅広く研究し、現在では海外の金門会館の調

査も行っている。今回は、ハーバード大学で在外研究中ということもあり、スゾーニ (Szonyi) とともに、戦時動員体制下のジェンダー問題という先端的な研究領域に挑戦いただいた。スゾーニ (Szonyi) は歴史学と政治学的なアプローチを採るが、文献史料には限界があるため、フィールドワークも多く用いている。江は、建築学を土台にしつつ、多様なディシプリンをもちいて、金門という対象を解きほぐしている。最後に筆者は、僑報や軍事新聞等の文献史料に依拠した歴史的な手法と、現地での聞き取り調査などに基づいて、僑郷としての金門の姿を描いた。

これらの論考は、金門島の中のミクロな領域を掘り下げつつ、同時に空間的な広がりや歴史性を考察しようとするものである。『地域研究』に対して少しでも貢献するところがあれば幸甚である。

(かわしま・しん／東京大学大学院総合文化研究科)

金門島の概況

川島 真

金門島は、中国福建省の厦門沖の島であり、金門島と西側に位置する小金門（烈嶼）、および周辺の島々から構成されている。最も近いところで、中華人民共和国側と2km前後しか離れていない。面積は一五二km²、人口はほぼ一〇万人弱である。他の福建・広東沿岸部の郷村がそうであるように、海外移民を多く輩出する僑郷の島であったが、一九四九年以後、中華人民共和国と中華民国の軍事境界線のひとつとなり、やがて福州対岸の馬祖島とともに、台湾防衛のための前線の象徴となり、一九九二年まで軍事動員体制下に置かれていた。一九八〇年代後半に台湾と澎湖は民主化が始められたが、金門や馬祖の民主化は、数年遅れで始まった。今世紀に入り、金門は中国と台湾の間の交流の窓口ともなってきた。歴史的に、福建や広東沿岸部の島々とも、また台湾とも異なる歴史を歩んだことから、この島の

人々は独特のアイデンティティを育んでいる。また、二〇一二年に成立二〇〇年を迎える中華民国にとっては、（日本の軍事占領を除いて）馬祖とともに、ほとんど唯一、二〇〇年にわたって統治した地域となっている。

自然環境

年間平均気温が二〇℃、降水量は一〇〇〇mm前後の亜熱帯式気候に属する。土壌は花崗岩と赤土で、稲作も含めて農業には必ずしも適さず、酒の材料になるコーリヤンなどが植えられている。また、金門牛が著名である。島で最も高い山は太武山で標高二五三m。中央部が平野になっており、東側の方の標高が高い。軍事最前線であったこともあって自然が比較的よく保存され、一九九五年には金門国家公園が開設された。



図1 金門島の位置図
(金門島政府、2008 年)



図2 金門島全図
(金門島政府、2008 年)

社会環境

主に福建南部からの移住者により形成された郷村は、基本的に単姓村で家廟（宗祠）を中心に組織された村民たちは、基本的に村（一族）単位で海外に移民していった。近代には海外からの送金（僑匯）に基づいた近代建設が行われた。言語は福建南部の閩南語であるが、同系統の言語でありながら、単語などの面で日本語の影響を受けた台湾語とはやや異なる。文化大革命の影響を受けた中国大陆の福建、広東地区と異なり、僑郷としての性格を現在も残しており、島全体が伝統的な華南社会を残す貴重な場を提供している。

政治と行政

現在は中華民国の統治下にある。歴史的には福建省同安県の一部であり、明清交代期には鄭成功らがここを拠点にしたことで知られ、一九一五年には県が設置された。一九四九年に中国人民解放軍の攻撃を受けた古寧頭戦役のあと、金門軍管区行政公署の管轄下で軍事総動員体制がしかれた。五三年には県政が回復されたものの動員体制は継続された。その後、一九五〇年代にはしばしば攻撃を受けたが、

六〇年代以後には砲撃が儀礼的に行われるなど一定の落ち着きを見せた。軍事総動員体制は一九九二年まで続いた。二〇〇四年には、中国の厦門との航路が開かれて、小三通が始められ、兩岸交流の前線となった。

金門近現代史年表

14世紀後半	明朝が福建に設けた五衛十二所のひとつになる。金門の守禦千戸は永寧衛に属す。
17世紀	鄭成功の拠点となる。この頃、澎湖や台湾（安平・鹿港）への移民が進行。
1664年	清の攻撃を受け、遷界令により島民が強制移住させられる。1683年以後、帰島。
17世紀後半～18世紀	金門は泉州府同安県に属す。
18～19世紀前半	第一次移民ブーム（マラッカ、ベナン、シンガポール、ブルネイなど）
1860年代	第二次移民ブーム。山后郷の王氏、新頭郷の陳氏が、長崎・神戸にて成功をおさめる。
1910～20年代	第三次移民ブーム。
1915年	金門県設置。島内人口8万弱。
1929年	移民の減少。当時の島内人口5万弱。
1933年	閩変の発生。金門は中華共和国の統治下に置かれる。
1937年	日本軍が占領。汪精衛政権統治下に置かれる。
1945年	中華民国の統治恢復。
1949年	人民解放軍が金門を攻撃、上陸（古寧頭戦役）。軍政が敷かれる（53年解除）。
1951年	金門高級中学開校
1954年	中国側が金門を砲撃（九三砲戦）
1958年	中国側が金門を砲撃（八二三砲戦）。以後、砲撃が [※] （儀礼的に）継続。
1979年	米中国交正常化にともない、中国側は金門砲撃停止を発表（1978年12月）。
1992年	戦地政務の終了。
1995年	金門国家公園成立。
2001年	小三通実施（アモイ港、泉州港）
2003年	国立金門技術学院設置
2010年	国立金門技術学院、国立金門大学に昇格。

（川島真・江柏焯作成）